

辰年の竜骨車

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

2024年は甲辰の年に当たる。干支のなかで龍（辰）だけが架空の生きものだ。龍は水や海の神とされ、竜巻や雷などの自然現象を起こす、良くも悪くも大自然の躍動を象徴するものだ。古来、わが国が多大な影響を受けている中国では、龍は最も神聖な霊獣であり、殷代（B.C.17世紀～B.C.1046）の甲骨文字に既に「龍」の文字を見ることができる。周代（B.C.1046～B.C.256）には龍は雷雨の神とみなされるようになり、雨乞いで祀られる。漢代（B.C.206～A.D.8）以降には皇帝は龍によって生まれたとする皇帝龍生説が起り、龍の文様は皇帝の独占で、一般の使用が禁じられた。一方、西洋では龍に相当するのがドラゴンで、こちらは悪魔の使いである。ドラゴンは水に関係するというよりも、翼がある空飛ぶ爬虫類のような形状をしている。東西の認識、文化の違いがここにも現れていて興味深い。

東アジア地域の一員である日本は、当然ながら龍神（水神）信仰である。毎年、全国の主要博物館がメンバーになっているインターネットミュージアム（I.M.）でミュージアム干支コレクションアワードが開催され、各館自慢のその年の干支関連資料がエントリーされる。竹内栖鳳が20代初めに描いた迫力のある「雲龍」（京都市京セラ美術館）、天下三名槍の一つで刃に俱利伽羅龍が彫刻された「日本号」（福岡市博物館）、佐賀藩主・侯爵鍋島家に伝わる、胴体や手足が自在に動く龍の置物（徴古館）など、錚々たる逸品が揃うなか、わが天理参考館が満を持して送り込もうとしたのが竜骨車である。竜骨車とは農具のひとつで、木製の揚水機のことをいう。「なぜ農具を？」という声が聞こえてきそうだが、

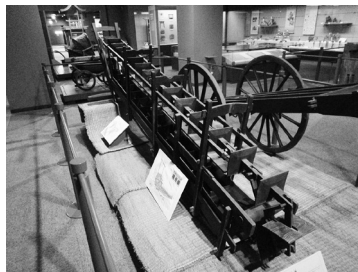


図1 竜骨車 滋賀 全長368.0cm
羽33枚のうち、1枚欠失するのみ。
〈天理参考館蔵〉

ゆめゆめ侮ることなかれ。これは実に貴重な逸品で、江戸時代に発明された農具にも関わらず、現存するのは全国で30台ほどしかない。しかも当館蔵品は状態がすこぶる良好な美品で、ウィキペディアの「竜骨車」の説明に展示画像が使われているほどである。

残念ながら応募期間が短く、今回のエントリーは見送りとなった。ぜひ2階展示室で実物をご覧ください。

水田稲作農業を主体とするわが国の農業にあっては、灌漑用水は最重要案件である。兼業農家であった元職員の言によると、「施肥や農薬の散布も重要だが、栽培上最も管理が必要となるのは水だ。水田に常に水があれば稲は育つというのは間違いで、時に応じて水を出し入れしなければならない」のだそうである。歴史的に見ても、古代には池や溝の構築、中世では用水路の開発や用水の配分、近世になると各地で治水工事がなされて用水路灌漑による耕地の開発が進んだ。水をめぐって争いも頻発する。中世ですでに見られた淀川や宇治川の水車のように、水が流れている場所で自然に回転させて、水を田に注ぎ入れることができない場所の耕地化も江戸時代には拡大した。そうなると、低い場所の水源から、高いところにある水田に水を引き揚げる道具が必要になる。揚水機としては、局地的に使われていた竜骨車が、農業先進地帯であった近畿を中心に普及し、宝暦・安

永頃までさかんに使われた。竜骨車自体は中国からの伝来で、一尺余りの軽く丈夫な板でつくった水槽状の入れものを継ぎ合わせ、下部を水中につけて水を掻き上げて順次上部に送る仕組みになっている。キャタピラの形状で、水を汲み上げるときに龍の背骨が波打つように見えることから、その名が付いたのだろう。上部に送る動力は人で、2人が上部の車輪を踏んだりハンドルを回すことで回転させるのである。元禄3年（1690）刊の『人倫訓蒙図彙』に「民間にこれを求めて田の流れを仕懸る也。大坂天神橋の西又四郎これをつくる」と記しており、わざわざ製作者の名前をあげているほど特殊な技術を有する職人が必要だったと考えられる。そのため生産数も少なく、それに応じて価格も高く、構造が複雑なためにこわれやすかった。結果的に、一部の富裕な農民しか保有することができない。元禄、享保と益々耕地開発が進行して、揚水機の需要が増してくると、簡便な踏車がその座を奪った。踏車は中世の水車のように流れを利用して自然に回転するものではなく、人が水車の羽に乗って足を交互に踏み下して車を回すことで下の水をすくい上げ、その水が板でつくった枠を水路にして高いところに送り込まれる仕組みになっている。寛文年間にはじめてつくられた。かなり高所でも2段、3段と踏車を据えると大量に揚水することができる。

西日本では電力揚水がおこなわれるようになったつい最近、大正時代から昭和時代まで現役だった。ただ大変な労力を必要とし、現代のスポーツジムのマシンにある自転車こぎやステッパー運動と全く同じ動作である。これを暑い夏の日差し



図2 踏車 奈良 明治27年 全長224.0cm
「郡山新町大阪屋栄治」銘。〈天理参考館蔵〉
羽15枚。水車部分の径148cm。

の下で、一日中黙々と続けていた昔の人の労働量に頭が下がる。なるほど水を扱うことは、龍を御する如く、身を挺することなのかもしれない。どうぞ今年も龍が暴れず、安寧な世となることを願ってやまない。

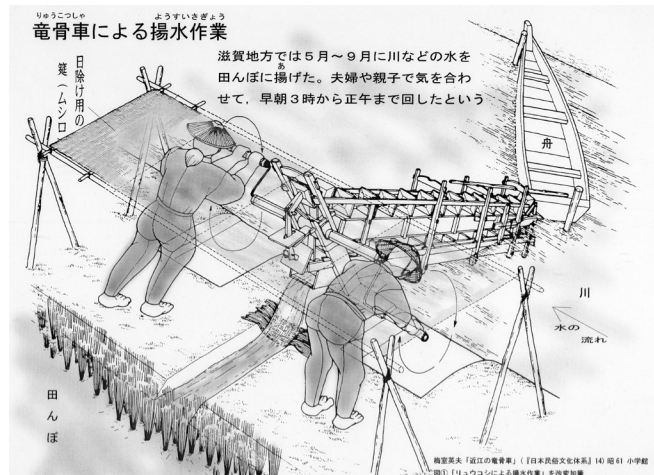


図3 竜骨車による揚水作業図解 〈天理参考館蔵〉